

令和 2 年 6 月 3 日現在

機関番号：37104

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K21304

研究課題名(和文) デイケア長期利用の統合失調症者の主体的社会参加を促す個別的看護介入プログラム開発

研究課題名(英文) Individualized Nursing Care for long-term user of psychiatric day service

研究代表者

福浦 善友 (Fukuura, Yoshitomo)

久留米大学・医学部・講師

研究者番号：00572942

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の当初の目的は、デイケア長期利用の統合失調症者の主体的な社会参加を促す個別的な看護介入プログラムを開発し、スタッフも実施可能な形態として構築しつつ、それを組み込んだデイケアプログラムの改善の開発を試みるものであった。結果として、事前に作成したケアプログラムをデイケア長期利用の統合失調症者に適用し修正を図りながら検討できた。しかし、実施可能な形態にまで構築することはできなかった。その要因について参加者と話し合いを重ねた。その結果、プログラムを現場で適用するには、関わる時間やタイミングを明確にし、かつ、教育的時間の確保の機会を設けて多職種に伝達する自信をつけることが必要であるとわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで集約してきた指針となる個別的看護ケアプログラムの使い方を、デイケアスタッフと事例によるカンファレンスで理解促進を図り、実際にスタッフに適用させて、適用の成否を評価しながら問題点の検討を重ねた。結果、実施可能な形態にまで構築することはできなかったが、プログラムを意識に上らせ個別的な患者(利用者)像につくりかえようとする視点や、利用者の強みやもてる力を意識的に捉えようとする態度に変化した。

研究成果の概要(英文)：The objective of the study was to develop nursing care for schizophrenic people who used day care for long periods of time to participate in society on their own initiative.

It was to develop a workable nurse and apply it to day care. The results were reviewed with modifications to the prepared nursing care for patients with schizophrenia who had long-term use of day care. However, nursing was not completed. The reason was that it took time and timing to apply the developed nurses to day care. In addition, they had to be confident about explaining to other staff.

研究分野：精神看護

キーワード：精神科デイケア 社会参加 看護介入 個別 統合失調症

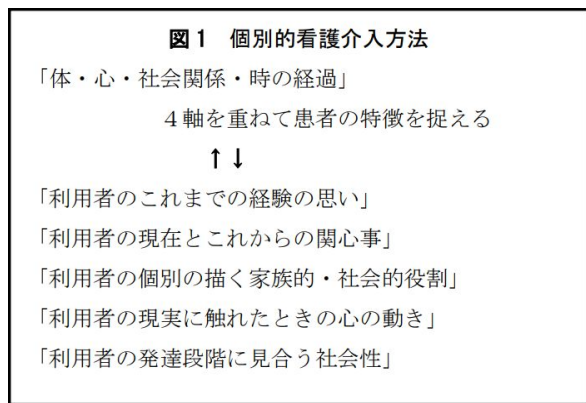
1. 研究開始当初の背景

国が精神障がい者(以下,利用者)の「入院医療中心から地域生活中心へ」という基本理念を推し進めて10年が経過する。その地域ケア重視への流れのなかで,社会復帰体系のひとつに位置付けられているのが精神科デイケア(以下,デイケア)である。デイケアの原型は,Cameron(1946)の病院治療の補完・充実という医学的側面を重視したものと,Biere(1964)の精神障害者の生活や自発性などを重視し集団の働きや患者の社会生活に関心を向けた地域ケアの視点のものが代表的である。この両者の発想はそのままわが国にも投影され,「再入院防止」「生活体験の拡大」「居場所の提供」を基礎とし,現在もその方向性は変わっていない。

デイケアでは,通常プログラムと呼ばれる集団活動が中心となる。本来,目指すべき目標は,利用者一人ひとりの自立発展である。集団力動に着目するのも,集団のなかにいる個人の心理的動きをとらえ,成長を促すためである。しかし,最近の実態調査によれば,この利用者の80%は統合失調症であり,初回入所からの利用期間も5年以上が43%であった。このことは,現在のデイケアの機能が統合失調症の利用者にとって「居場所デイケア」として,大きな部分を占めていることを示唆している。また海外でも,デイケアが十分活用されていないと同様の報告が見られ,利用者がデイケアに適応する条件,治療目標,利用期間などが不明確なままに実施されていることが理由として挙げられている。実際,デイケアから離脱できない理由として,「デイケア外での生活目標を見いだせない」「中途半端にしかデイケアを利用できていない」等の利用者の声がまとめられている。要するに,デイケアはそのような利用者の「病気を治したい」「社会参加のために訓練したい」という思いに応えるに,充分には機能していないと言える。そこで,従来のプログラムに利用者を当てはめるのではなく,利用者の社会参加を促せるように機能する新たな個別的な看護介入方法を検討する必要があると考えた。

申請者は,これまでに長期入院後デイケアに長期間通所していた40代の統合失調症者との関わりで,利用者が自覚した本当の思いを実感した。その利用者は「デイケアにいれば困らなくてすむ」と思っていたが,関わりによって「自分にそう言い聞かせてきた。本当は何かしたい」という思いを打ち明けてきたので,一緒に行事に参加し役割をもつなど利用者を良い方向に導く結果を得た。そこで,申請者は,どのように患者を捉え,そこから離脱させるステップとしてどう考えたのか,どのように関わったのか,患者と申請者の言動を取りまとめた。さらに,類似した別の患者と関わりを継続し,集団活動の参加の第一歩において個別性(個別の思い)に迫っていく看護介入¹⁾²⁾³⁾を類別化したところ,その内容は,体と心と社会関係,それが時の経過によって変化したことを4つの軸としてみて,患者の特徴を捉えつつ,利用者の現象と相互に重ねながら看護介入していくものであった(図1)。

この個別的看護介入方法(以下,介入方法)を軸に,患者の過去の経緯において培ってきた生活体に沿った関わりができれば,患者は社会生活に向けた思いを自覚し,自ら社会参加へ力を傾けようと,心を定めてくことができる。これまで,先に述べたように,デイケアのプログラムはその状況から役割の見直しが期待されている。例えば,医療や訪問活動等の既存のサービスを組み合わせ,ケアマネジメントの手法を用いたケア提供の有効性が示唆されている。つまり,これまでのデイケアという集団での治療プログラムに加え,個別のケアの双方を包括したケアが求められてきている。そこで,「居場所デイケア」という現状と不可分の利用者の参加のあり方を放置するのではなく,利用者が「社会参加したい」という思いに目を向け,支援者がその積極的主体性を引き出す介入方法が必要であると考えに至った。



2. 研究の目的

精神科デイケアに通所しても集団プログラム活動に参加しない精神障がい者の心の奥底の「治りたい」思いを引き出し,デイケア長期利用の統合失調症者の主体的社会参加を促す個別的看護介入方法を検討することを目的とする。

3. 研究の方法

1) 研究方法: 長期にデイケアに通所している統合失調症の利用者が所属するデイケア施設に勤務する支援者3~4名とグループディスカッションを行い,事例および実際のデイケア利用者の特徴を捉え,社会参加への思いを高める介入方法について討議を行った。

平成28年度は,「デイケアに長期に通所するがプログラムには参加しない40代の統合失調症の利用者Aと利用者B」の2事例を使った。

事例A: 40代前半の男性で統合失調症。大学を中退後,引きこもった生活が続きやり直したい思いから他県に単身生活をするが,部屋からの異臭騒ぎで強制退去となった。そのころから「菌に侵される」などの妄想により精神科病院に入退院を繰り返し,長期入院を経て長期間デイケア通所をしているケース。

事例 B：40 代前半女性で統合失調症。12 歳の時不登校になって以来他人の「声が聞こえた」などで入退院を繰り返し、デイケアや作業所への通所を 10 年ほど継続していたが、「周囲が悪口を言う」と訴え他者とのトラブルが絶えなくなったことで、入退院とデイケア通所を繰り返しているケース。

平成 29 年度からは、事例検討会を行ったデイケアスタッフが実際にデイケア利用者 3 名に個別の看護介入方法を適用し成否を評価した。

2) 分析：平成 28 年度から平成 30 年度まで継続したグループディスカッションから、支援者の言動の過程を追跡し、個別的な看護介入の実施における問題点を探りながら、介入方法の軸となる患者観や看護観をつかみ得る方向に変化したのかどうかを質的記述的分析に基づき特徴を集約した。

3) 倫理的配慮：研究の主旨、目的、方法、研究参加への自由意志とプライバシーの遵守について文書にてデイケアスタッフとスタッフが介入するデイケア利用者に依頼し、同意を得た。また、研究者の所属する大学とデータ収集施設の倫理委員会での承認を得て行った。

4. 研究成果

対象となったデイケアスタッフは、30 代前半から 50 代後半までの 4 名(男性 2 名、女性 2 名)で平均年齢は 40.5 歳であった。実際にデイケアスタッフが介入した利用者は 20 代から 50 代前半までの 3 名(男性 2 名、女性 1 名)で平均年齢は 39.7 歳であった。

以下、グループディスカッションの継続過程に伴い個別的看護介入の特徴を示す。

(1)平成 28 年度

研究者がこれまでに集約してきた個別の「社会に参加したい」主体性の強化を図る個別的看護介入方法について、「デイケアに長期に通所するがプログラムには参加しない 40 代の統合失調症の利用者 A と利用者 B」の 2 事例のデータベースとプロセスレコード(関わりの場面)を資料として使い、利用者の対象像を捉え介入方法の理解促進を図った。

これらの事例を通してデイケアスタッフは、「入退院を繰り返しているから社会経験が少ない」「交流が少なくなっている」「臭くて周りから苦情があるから見た目をなんとかしたい」「勉強ばかりしていたから交流もなかったのだろう」「転居もあり遊びもできなかった」「決まり事がある中で何年もやってきている(から外の世界が怖いと思っているに違いない)」など、スタッフ独自の視点で捉えていた。検討会を続ける中で、「周りがばい菌だらけと思いつけるのは耐えられない」「居場所がない」などの意見が出るようになった。これまで、スタッフはスタッフ自身の立場から利用者を捉えた発言が目立っていたが、検討会を通して利用者の立場に立った思いを述べるように変化した。スタッフは、「利用者を通して過去を振り返っている。自分の情報だけで利用者を見てしまっていた。それが偏った対象像となっていた」「今の状態だけを見て関わってしまっている」と述べた。討議する事例を A から B に変更し再度検討すると、「本来の 40 代とは...」や「家族、両親は 歳の高齢者で本人と関わることは難しい」など、利用者の現象像だけではなく【人間一般とは何か】が意識に上るようになってきた。そして、過去に働いた経験や集中する力があつた過去の状況にも目を向け、利用者の【持てる力】や【人としての役割】などに着目するようになった。そのような【持てる力を発見したうえで、セルフケアのどの部分を向上させたらよいか】という意見が出るようになった。一方で、デイケアには多くの利用者が参加している現状があるため、通常行われているプログラムの前後の時間をどのように活用できるかが今後の課題となった。

(2)平成 29 年度

平成 29 年度は、平成 28 年度に継続してきた事例検討会でつかみ得た利用者の対象像の捉え方、介入方法に基づいて、実際のデイケア利用者に対してデイケアスタッフが使い介入方法の定着を目指した。「自己臭恐怖のある 30 代統合失調症の男性」、「身体面が不安定で就労の意識があつてもできない 20 代女性」、「遠隔操作されるという妄想をもつ 50 代男性」のケースについてディスカッションを行った。利用者は入退院を繰り返しデイケアに来たり来なかつたりを繰り返すものの、就労事業所に通所していた経験があるなどの情報から、スタッフは「行動に移せないから葛藤ばかりで自分にあつた活動を見いだせていない」「後戻りしたくないはず」「能力があるけど、毎日同じ事をして何のためになるのか疑問に思うのでは」等、利用者の思いを積極的に描いていた。さらに「結婚したい」「家族をもちたい」等の表現もキャッチしていた。スタッフは、利用者の【24 時間の過ごし方】を意識し、【どのような条件下であれば行動できるか】、【発達段階の時期】を捉え直しながら【利用者の思いを追体験】していた。そして、全体像を捉える過程で生じる葛藤は【健康的な反応としてみる】、【心が揺れている証拠なのでチャンスととらえる】というポジティブな反応として捉えた。しかし、相手の立場に立って追体験するだけでは支援することはできないので、スタッフは支援者の立場に戻り個別的な看護介入の方向性として【達成感の強化】、【後戻りしたくない思いの強化】、【何が損で何が得か、自己決定を促しているか】、【過去の就労経験を楽しく聴き引き出す】、【成功体験に目を向ける】等が集約できた。さらに、スタッフは精神障害者の体力面における不安要素を見出し【身体面の整え】が集約できた。

(3)平成 30 年度

本研究は、個別的看護介入方法が将来的には看護師支援者だけで実施可能な形態にまで構築することである。そこで平成 30 年度は、介入方法を理解した支援者が利用者に対して適用し、利用者の状態の変化を追いつつ、前年度と同じ方法で、実施における問題点を探り、介入方法の軸となる患者観や看護観をつかみ得る方向に変化したのかどうかを検討した。利用者に対し継続的に関わった支援者は、【心身における健康的な側面を見出す】、【利用者の課題は何なのか解釈に偏らないように利用者に状況を確認しながら全体像を捉えなおす（あるいは、つくりかえる）】、【医療者が先まわりして利用者の考える（意思決定する）機会を奪っていないかを意識する】ことがわかったと自己評価できた。

これまでのグループディスカッションを通じて、社会参加に向けて支援を継続的に実施する際に支援者が陥りやすい傾向として、利用者のもてる力を意識しなかったために先回りして支援してしまうこと、また全体像を把握するには時間が必要であると考えてしまい一気に情報を得ようとしてしまっていた。さらに、支援者は自身の専門範囲ではないとして就労や地域の施設に関しては他職種に任せるという意識が強いことが分かってきた。その理由として、どのような就労施設があるのか、また利用者にマッチングする就労施設は何なのか、という就労に関する知識不足が考えられた。しかし、看護職者をはじめとする支援者は、これまで多くの時間を利用者に関わってきた経験があるため、一度「体、心、社会関係、時の経過」という 4 つの柱で丁寧に全体像を捉えてしまえば、利用者の「治りたい」「働きたい」など心の奥底の思いを予測することができ社会参入に向けた効果的な関わりができると考えられたので、今後は就労を含めた有用な地域支援の方策を検討していくことが課題である。

引用文献

- 1) 福浦善友 (2013). 精神科デイケアにおける長期利用者への看護に関する一考察(第一報) -利用者が社会生活に目を向け始めた場面を通して- . 宮崎県立看護大学研究紀要, 13(1), 16-28 .
- 2) 福浦善友 (2014). 精神科デイケアにおける長期利用者への看護に関する一考察(第二報) -統合失調症利用者が同世代の社会生活のあり方を意識していく場面を通して- . 宮崎県立看護大学研究紀要, 14(1), 37-51 .
- 3) 福浦善友, 小笠原広実, 他 (2014). 統合失調症患者の「もてる力」を見出す看護の視点 - 精神科デイケア長期利用者との関わりから - . 日本精神保健看護学第 24 回総会・学術集会・抄録集, 96 - 97 .

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 福浦善友	4. 巻 20
2. 論文標題 デイケア長期利用の統合失調症者の主体的社会参加を促す個別的看護ケア	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 地域ケアリング	6. 最初と最後の頁 66-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	森 嘉彦 (Mori Yoshihiko)		
研究協力者	田上 淑子 (Tanoue Yoshiko)		
研究協力者	赤星 誠 (Akahoshi Makoto)		